

銀河鉄道の「燈台守」ヘラクレス仮説からみた宮沢賢治の重層的世界

米地 文夫*

要 旨 宮沢賢治の未完の作品「銀河鉄道の夜」の多くの登場人物のうち、燈台守は最も印象的なキャラクターの一人である。この燈台守はヘラクレス座の近くで銀河鉄道の客室内に現れる。彼は黄金のリングを持ってくるヘラクレスであるとともに、賢治と同郷の花巻出身の農業技術者・鳥善鄰博士でもあり、なおかつ北上河畔に一人立つ賢治自身でもあった。ヘラクレス座には燈台のような変光星もあり、鳥博士はゴールデンデリシヤスを米国から日本に初めて導入している。この燈台守挿話は賢治作品における重層的世界の典型例の一つなのである。

キーワード 宮沢賢治、「銀河鉄道の夜」、燈台守、ヘラクレス、鳥善鄰、ゴールデンデリシヤス、農業技術者

はじめに

宮沢賢治の未完の作品「銀河鉄道の夜」の中の天空を走る列車に乗っている登場人物には地上から来た客と天上の住人とがあるが、後者のうち「鳥捕り」については、こぎつね座（雁を啜えた小狐座）の狐の化身であり、さらに花巻近郊の「後藤野の親分狐」の化身でもあることを、本誌（米地、2008）において明らかにした。この小論はその賢治の「銀河鉄道の夜」のもう一人の重要な天空の住人である乗客「燈台守」（燈台看守）¹⁾について検討する。

「鳥捕り」に関しては、多くの論説があるが、同じく不思議でかつ重要な役割をもつとみられる「燈台守」については、これまであまり論じられていない。「燈台守」は苹果すなわちリングを持ち込むという行動のために登場するので、そのリングの不思議さについて論じられることは多いものの「燈台守」についての検討はほとんどなされていないため、抽象的な論議にとどまっている。本稿はそのリングを手掛かりに「燈台守」とは何者であるのかを探り、さらにリングが登場する背景を探り、賢治がこの燈台守の挿話にこめた意図を明らかにしたい。

I 「燈台守」とヘラクレス

1. 「銀河鉄道の夜」の「燈台守」とリング

「銀河鉄道の夜」の主人公ジョバンニとその同級生カムパネルラの乗っている銀河鉄道の客車に「燈台守」もいつの間にか乗り合わせていた。彼は「尖った帽子をかぶり、大きな鍵を腰にさげた人」で、知り合いの「鳥捕り」から渡り鳥のことを聞かれて、燈台の灯を遮って飛ぶ渡り鳥の話をし、それによって点灯時間が規則に合わないことがあるという意味のことを語る。

鳥捕りが姿を消したあと、乗り込んできた日本人の名を持つ姉弟²⁾とその家庭教師の青年の海難の話聞いたあと、彼は「なにがしあはせかわからないです。ほんたうにどんなつらいことでもそれがたゞしいみちを進む中でできごとなら峠の上りも下りもみんなほんたうの幸福に近づく一あしづつですから。」と言って慰める。

そのあと、彼は「いつか黄金と紅でうつくしくいろどられた大きな苹果を両手で膝の上にかゝへて」家庭教師の青年や姉弟、ジョバンニたちへ一個ずつ勧めるのである。姉弟と青年は食べ、ジョバンニたち二人はポケットにしまう。

燈台守はこの辺、つまり天上では作物はひとり

* ハーナムキヤ景観研究所

でに稔り、大きく、匂いもいい、と説明し、かすが残らない、と話す。その通り、剥いたリンゴの皮は床に落ちるまでの間に「すうっと、灰いろに光って蒸発」したのである。

燈台守について重要なポイントは次の諸点である。

- ①彼の燈台のそばは通過する渡り鳥の群が多い。
- ②彼の燈台は①のために規則通りには点灯しないようにみえる。
- ③彼はどんな辛いことも、本当の幸福に近づく正しい道の一步であると説く。
- ④彼は黄金と紅で彩られた大きなリングを乗客に配る。
- ⑤彼は大きな鍵を腰に下げている。

この中で燈台守らしくない点は③と④である。特に④は魚介類など海産物か浜辺の産物を持ってくるなら自然であるが、なぜリングなのかについて説明はなく、さらに持ってきた五個全てを乗り合わせた乗客に配るという気前の良さもどこか不思議である。この不思議さは、次節以下に述べる「燈台守=ヘラクレス」仮説によって説明できると考えた。

なお本稿では、人物名としてはギリシャ語のヘラクレスを、星座名はラテン語を用いるためヘルクレスの名を用いることとする。

2. 燈台守とヘルクレス座

私は燈台守がヘルクレス座であるという仮説を考えた。その理由は、燈台守が登場する場面で銀河鉄道が走っている天空の位置と、燈台に似た変光星を持つこと、の二点である。

燈台守が現れるのは銀河の岸を南へ走る列車が白鳥の停車場すなわちくちょう座を発つ場面で、消える場所ははっきりしないが、さそり座以北である³⁾。この間の銀河に沿う星座のうち「銀河鉄道の夜」に名前が出ているのは鷲の停車場のわし座、鳥捕りとして登場するこぎつね座(米地、2008)の両者のみで、や座、ヘルクレス座、へび座、へびつかい座、たて座などは見当たらないとみられてきた。しかし鳥捕りがこぎつね座である

(米地、2008)とすれば、この五つの星座のなかに燈台守を表意するものがある可能性が高いのである。

私はこの中で燈台を思わせる星がヘルクレス座にある点に注目した。すなわちヘルクレス座の α 星のオレンジ色の三等星ラース・アルゲティは、変光星で3.0から3.9等まで変化する。賢治の当時の小学生向けの啓蒙書に山本(1929)は「燈臺のやうな變光星」という一節を設けて、「海岸に立って、燈臺の火を見てみますと、正しく一定の時間に、火が明るくなったり、又は消えて小さくなったりします。あれと同じやうな變化をしてゐる星が天にもあります。」と変光星を説明しており、ヘルクレス座の α 星(すなわち最も明るい、いわゆる主星)も変光星として名が挙がっている。

ただし α 星はこの燈台のような規則的に変光する規則的変光星ではない。けれども、この α 星については山本(1929)の本に「不規則に光が變る星」とあるように、不規則変光星であるので燈台の規則的な変化と異なるようにみえるものの、燈台守は灯が規則以外に変わるのはなぜかと、あちこちから電話で故障(苦情)が来たと話しており、この燈台が不規則変光星の α 星であることと符合する。

その不規則になった理由として燈台守は「渡り鳥どもが、まっ黒にかたまつて、あかしの前を通るので、仕方ありませんや。」と言う。渡り鳥に擬せられるものは流星群であろう。有名な流星群の一つである「こと座流星群」は約59年周期で大出現をみせるが、賢治の時代には1922(大正11)年がそれに当たっていた。この流星群の放射点はこと座のはずれ、 κ 星の近くにあるとして「こと座流星群」と名付けられたが、その後、各星座の範囲を確定した際にヘルクレス座の区域となった。またそのほかにもヘラクレスT流星群と呼ばれるものがあり、1930(昭和5)年に突然大出現をして人々を驚かせた。

3. 「燈台守」と「鳥捕り」の尖った帽子

「鳥捕り」が乗車してきたとき、「燈台守」が「尖っ

た帽子をかぶり、大きな鍵を腰に下げた人」として席に座っているというのが、彼の出てくる最初のシーンである。これに対して「鳥捕り」については帽子については何も記されていないので、読者は無帽であるというイメージを持つ。ところが「鳥捕り」が姿を消したとき、「あの鳥捕りの広いせなかも尖った帽子も見えませんでした。」とあるため、帽子をかぶっていたことがわかる。「鳥捕り」は「燈台守」がまだ登場していない第二次稿の中にすでに書かれていた。この段階では、燈台に鳥が衝突して落ちることから連想して、燈台に化けて天の川のほとりに立ち鳥を捕らえる狐を描いていたと思われる。これはこぎつね座とヘラクレス座とを合体させたものと考えられる。

一方、第三次稿では二つの星座を分けて、もう一人の同乗者として燈台看守が別に創作され、燈台の頂部を示す尖った帽子と腰に付けた鍵という特徴ある様子で登場する。第三次稿では消すべき尖った帽子が消し忘れのまま、鳥捕りの方にも残ったのであると考えられる（米地、2008）。

4. ヘラクレス座の現れる賢治作品

ヘラクレス座には1~2等星が無いため、あまり目立つ星座とはいえないので、果たして作品に描くほどの関心を賢治は持っていたのであろうか。

その答えは「春と修羅」第二集のなかの詩「温く含んだ南の風が」の下書き稿にある。この詩の夏の夜空を描いた描写のなかに星座名「ヘラクレス」が登場する。まず最初に「白鳥座から琴（ライラと振り仮名あり）にかけて…立派な蛇の紋ができ」とあった箇所を「ヘラクレスから麒麟へかけて／難蛇竜家の家紋を織り」と直していることが挙げられよう。もっとも、そのあとで「星のまばらな西寄り／難蛇竜家の家紋を織り」として定稿としている。この「ヘラクレスから麒麟へかけて」がヘラクレス座からきりん座にかけてのことであるのは言うまでもない。このように、賢治はヘラクレス座にも注目していたのである。

また、ヘラクレス座にいわゆる太陽向点があることも賢治は知っていたであろう。太陽系は秒速

19 kmという早さで移動しているが、その向かう先がヘラクレス座のξ星である。中学時代の賢治は小学生だった弟清六に「私達は毎日地球という乗物に乗っていつも銀河の中を旅行しているのだ」という話をしたという（宮沢、1953）。山本（1929）も小学生対象に「我が太陽も亦、木星や金星や地球や其の他の一族を引きつれたまゝ、ヘラクレス星座の方に向かって、毎秒十九キロの速さで、毎日毎夜、進行してゐることが知れてきました。」と書いている。太陽向点の位置はヘラクレスの左の手首に当たる。その左手に問題のリングの枝が握られているのである。つまり銀河鉄道は、まさにヘラクレス座の黄金のリングを目指して走っているのである。

5. 燈台守の黄金のリング

燈台守と親しい天上の人物としては鳥捕りがいるが、これについて私は、こぎつね座（雁を喰えた狐座）の狐の化身であることを見いだした（米地、2008）。とすれば燈台守もまた星座を表している、という仮説を立ててみた。こぎつね座の付近を銀河鉄道が通過する付近で鳥捕りが現れ、その鳥捕りが会話をかわす相手として燈台守も登場し、鳥捕りが姿を消してからもしばらくは車中にいることから、こぎつね座よりも若干南にある星座であると予想された。そのような位置にあり、しかもリングと関わる星座に当たるものはヘラクレス座である。

ギリシャ神話中、最も有名な英雄であり最強の勇士であるヘラクレスは天上にあげられてヘラクレス星座となった。ヘラクレスは多くの冒険を行うが、その中でも有名な話は「ヘラクレスの12の功業」と呼ばれるミケナイのエウリステウス王に命じられた冒険の物語である。その12番目（別書では11番目）の命令は、女神ヘラが西の地の果てにあるヘスペリデースの園に植え、竜に守らせていた黄金のリングの木から、そのリングを取ってくるという仕事であった。

この神話にはさまざまなバリエーションがあるが、そのなかでも良く知られているのは、西へ向

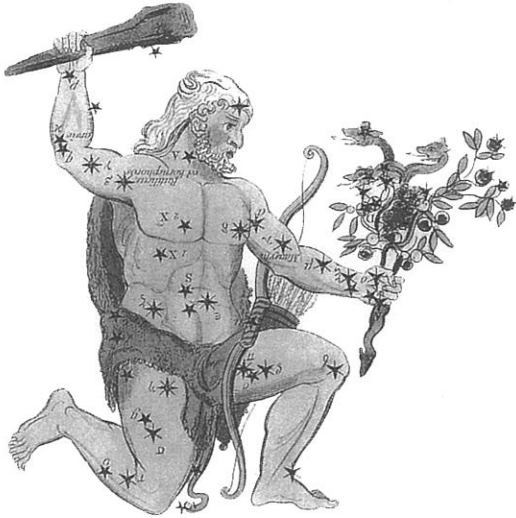


図1 古星座図のヘルクレス座

かうヘラクレスは途中、プロメテウスの肝臓を啄む鷲を矢で射てやり、プロメテウスから彼の兄弟のアトラスにリングを取る手助けしてもらおうとよい、という助言を得る。その助言通りに事は進み、リングを全部取ってミケナイに帰還するのである。ヘラクレスも、その鷲も矢も天上に揚げられて星座となって近接して位置する。なお、以上の説明はシャーデヴァルト(河原訳、1963)に拠っているが、鷲や矢については諸説がある。

ヘラクレス座となった姿は、右手にこん棒、左手にリングの枝と蛇(ヘラクレスが11番目の偉業で退治した冥府の猛々しい番犬ケルベルス Cerberus の尾の変化した姿)とを持ち、右手は棍棒を振りかざしている。この左手に持つ枝の部分だけをヘベリウスは独立した星座としてケルベルス座としたが、のちにリングの枝座 Ramus Pomifer と呼ばれたこともある。現在はヘラクレス座の一部である。

なお、「銀河鉄道の夜」の中に現れるリングがヘスペリデースの園のリングであろうという卓見は、すでに増田(2002)が提示している。ただし、同氏は燈台守をリングを守っていた竜、すなわち、りゅう座であると考えている。しかしながら、リングを守るはずの竜がそのリングを持ち出すとい

うことは不自然であり、やはりヘルクレス座が燈台守であると考えてるのが妥当である。

II 燈台守の登場バージョン

1. 第三次稿における燈台守の登場

「銀河鉄道の夜」の原稿は宮沢賢治が未完のまま遺したものである。最後まで枕頭におき、推敲を重ねていたとされる。その原稿は数段階のものが混在しており、「燈台守」は早い時期の原稿には登場していない。

その「銀河鉄道の夜」の原稿は、賢治没後、編集にあたった人々によって、一つの物語として編集され公刊されてきたが、彼らの纏め方によって、かなり違ったストーリーになっている。現在、定本のような扱いになっている『新校本 宮沢賢治全集』(筑摩書房刊、「銀河鉄道の夜」はその10巻と11巻に所収)は入沢康夫、天沢退二郎両氏が大別して四つの段階に分けた考え方に従っている。すなわち初期形(一)~(三)および後期形の4バージョンとして扱われることが多く、それらを第一~第四次稿とも呼ぶ。本稿では主として後者の呼称を用いる。なお、私は、初期形(一)から、より古く、トーンの異なる部分を先駆形(第0次稿と称すべきもの)として独立させ、後期形を(一)と(二)、すなわち第四次稿と第五次稿とに二分することを新たに提唱している(米地、2009a)。

燈台守はこの原稿の中で第三次稿と呼ばれているものから登場するのである。

2. 燈台守に関する賢治のメモ

燈台守はこの原稿の中で第三次稿と呼ばれているものから登場するとされてきたのは、賢治が第二次稿の余白に残したメモと第三次稿が対応しているからである。メモは次のように書かれている。

苹果の匂のする前に天上の燈台守
来ること必要なり
連 青年 妹、弟

このメモは原稿の第67葉に書かれており、少な

くとも、リングの匂いの前に燈台守が現れる第三次稿プロパーが書かれる以前に記入されていることは明らかである。第二次稿では、燈台守は登場しないものの、黄金と紅のリングは長姉がいつのまにか両手で膝の上にかかえている、という形で出現する。

「連」は「連れ」の意味ともとれるが、「関連して」という意味とも考え得る。ともかく、青年と妹、弟の三人が挙げられているのは、第二次稿には居た長姉と末妹とを省こうということなのである。

このことは賢治がリングに重要な意味をこめており、それを持っている役割をする人物を長姉から燈台守に代える必要があり、それをメモしたということなのである。

3. 長姉の燈台守への置き換え

この長姉すなわち一番上の姉は、実は不思議な役割を担っていたらしい。天上へ向かう乗客でありながら、天上の現象と関わる行動をするのである。0次稿（すなわち、第一次稿の前半部、米地、2009a）では、琴（ライラ）の宿すなわちこと座を離れて間もなく、いるかを話題にした会話を「細い銀いろの指輪をいぢりながら」おもしろそうに聞いていた、とある。このカギカッコのなかの部分は、推敲段階で書き加えられている。賢治は何らかの意味をこめて加筆したのであるが、これまでその理由を指摘した論者はなかったようである。わざわざ加筆するほどの指輪は、賢治が強い関心をよせたこと座の環状星雲であると思われる。

草下（1975）は賢治の「シグナルとシグナレス」で、シグナルが「四つならんだ青い星」の「脚もとの小さな環」を「環状星雲ですよ。」と言い、それをシグナレスに婚約指輪⁴⁾として贈るという記述は、琴座の四つの星との関係から、琴座の環状星雲M57と推定している。同様に長姉の「細い銀いろの指輪」もまさにこの琴座の環状星雲なのである。つまり長姉は車窓の外の星座から物を車内に持ち込むことのできる特別な能力と役割を持っていたのである。

第二次稿では次のような会話がある。リングに気づいた女の子がびっくりして長姉に「あら、お姉さん、苹果持ってるわ。」と話す。「え、さっきから持っていたわ。みんなで五つあるのよ。」と長姉は答えている。黄金と紅のリングは五個もあり、妹がびっくりするのであるからこれに乗ってきた時点から持っていたはずはないし、だれかが手渡したわけでもないのに、さっきから持っていたという。

したがってヘラクレス座のリングを、こと座の指輪と同じように不可思議な能力で車内に取り込み、手にしたということになる。

だが、楽しい銀河旅行の話であった0次稿ならともかく、海難事故の遭難者である長姉がいわば超能力者であるとするれば、悲劇を予知したり回避したりできたのではないか、という疑念が生じる。賢治は科学技術を学んだので、彼の幻想的な物語でも合理的な思考によって裏付けられており、この不自然さを解消しようとしたのであろう。

地上の人間であった長姉とは異なり、天上の燈台守ならばそれは可能であり、彼がヘラクレス自身であれば、彼が取ってきたリングを持ち込むのは不自然でない。

III 黄金のリングとゴールデンデリシャス

1. 持ち込んだ黄金のリングの謎

この黄金のリングが象徴するものは何か、については、これまで多くの論考が公にされており、死にゆくもののためのものとか、キリスト教と関わる、というような説が主である。例えば天沢退二郎は同じく賢治の童話「光と後光」なども引用しつつ《汽車の中の「苹果」は、あたかも死への旅路の象徴のごとくなのである。》（天沢、1985）とか、《他界性の象徴であり、“死者の見る夢の内実”でもある》（天沢、1987）という。その他、「聖なる糧」（菅谷、1980）、「死のイメージ」（村瀬、1989）、「天上の表徴」（萬田、1993）、「神の国のシンボル」（西田、2003）などと多くのそして大半はほぼ共通するイメージを述べている。

「銀河鉄道の夜」のなかで黄金とか金という色

の表示は、このリングのほかには北十字の描写にある白い十字架が「すきっとした金の円光をいただいて、しづかに永久に立ってゐる」という箇所と、南十字を過ぎたところで出現する「黄金の円光をもった電気栗鼠」しか無く、ともに聖なる円光の色なのである。したがって、このリングもキリスト教の聖なる果物、神果とする見方もできそうにみえる。しかしながら、燈台守はジョバンニたちの切符から彼らが仏教徒あるいは少なくとも非クリスチャンであることを知ったはずであり、にもかかわらず彼らにもリングを与えたことからみて、おそらく信仰とは直接の関係はないようである。

ジョバンニたちがこのリングを食べなかったことから、リングは死者のためのものとみる見方も一見、成り立ちそうであるが、カムパネルラも死にゆく身であるならば、彼も食べたはずなのにそうしていない。

したがって死と結び付けたり、キリスト教など特定の宗教と関連させたりすることは難しい。中野(1998)がパイのように男の子が食べた、という箇所に着目し、賢治の時代にパイのような西洋菓子は高級感を漂わせるものだったとして、このリングを「高級で、神々しくて、この世では味わえないもの珍しいごちそう」と述べたあたりが妥当であろう。

もちろん、このリングはヘラクレスが取ってきた黄金のリングを踏まえているものの、単に地上に対する天上、生に対する死、などの抽象的な意味ではなく、もっと具体的な高級感を漂わせる珍しいものを寓意している可能性が高い。そのことは次節以下で述べるように特別なリング、すなわち賢治は当時の最高の新品種ゴールデンデリシャスを念頭に置いているという推論を導くのである。

2. 黄金と紅のリング

「銀河鉄道の夜」のリングがヘラクレスが西の地の果てから持ってきた黄金のリングであるとするには、一つ問題がある。それは「黄金と紅にうつくしくいろどられた」リングとあるからである。

賢治が、黄金のリングを黄金と紅色のリングに置き換えたとすれば、なにかその理由があったはずである。私は賢治が黄金と紅色の大きいリングであるゴールデンデリシャスを念頭においたためと考えた。

ゴールデンデリシャスは米国のバージニア州の農園で1890年に偶然発見された品種で、1916年ころから米国の市場に出回り、香りが良く、大きい実を持つことからたちまち人気を集めた。しかも接ぎ木してから僅か一年半で結実するという、いわば夢のような新品種であった。これが「銀河鉄道の夜」のリングのいわばモデルとなったというのが、私の考えである。

この私の説に対しては二三の異論があると思われる。その一つはゴールデンデリシャスは黄色であり、黄金はよいが紅の部分もあるという記述と合わないという意見であろう。しかし現代の日本ではほとんどが黄色い果皮のみのゴールデンデリシャスであるのは、「さび」と呼ばれる褐色の斑点のできるのを防ぐため袋を掛けて作ったからであり、無袋の場合には陽に当たった面が淡紅色に色づく。科学的に説明すれば、紫外線を浴びてアントシアニンという赤い色素が生じたのである。

現在は四宮(2007)が指摘しているようにゴールデンデリシャスはその豊産性と適度な甘みから、ヨーロッパでは生食を中心に主要品種となっていたのであるが、無袋が多く、紅色に色づいたものは、maiden blush すなわち乙女の恥じらいなどと呼ばれて好まれている。日本でも普及当初は無袋の黄色に紅色のさしたものが売られていた。

単に天上のリング、ヘラクレスの得たリング、というなら黄金のリングでよかったはずであり、その方が神々しい感じである。ところが賢治はわざわざ紅を加えている。これがゴールデンデリシャスを想起して書いたという私の説の一つの根拠なのである。

また普通のリングについての記述ならば、黄金と紅とは書かずに、黄と紅と記すであろう。黄金の、と書くのには「ゴールデン」デリシャスこそ、

まさにぴったりなのである。

3. 天上の農業談

このリングの挿話で興味深い点の一つは、燈台守に日本人とおぼしき青年が礼を言い、それから「どこでできるのですか。こんな立派なリングは。」と聞くのに対する燈台守の答えである。

「この辺ではもちろん農業はいたしますけれども大ていひとりでいゝものができるやうな約束になって居ります。農業だってそんなに骨は折れません。たいてい自分の望む種子さへ播けばひとりでにどんどんできます。米だってパシフキック辺のやうに穀もないし十倍も大きくて匂もいゝのです。けれどもあなたがたのいらっしゃる方なら農業はもうありません。苹果だってお菓子だっかすが少しもありませんからみんなそのひとそのひとによってちがったわづかのかをりになって毛あなからちらけてしまふのです。」

多くの論者はこの説明を単に天上の神秘的、幻想的な話としてみるのみであるが、私はこの説明に「農業」という語が三度も使われている点に注目した。すなわち天上の世界の幻想的な雰囲気伝えるなら、「この辺では自分の望むものはひとりでにどんどん生えてきて稔るのです。…」と書けば良いはずなのに、種子を蒔く農業をしているのである。すなわち銀河鉄道の走る天上には農業があり、さらに先(上?)の「ほんたうの天上」に至れば、農業はないというのである。

農業技術者賢治は、銀河鉄道の走る空間を「夢の農業」ないしは「理想の農業」の営まれる世界として描いたのである。そして当時「夢のリング」ないしは「理想のリング」として農業技術者の大きな期待を集めていた、まさしく「大きくて匂もいゝ」ゴールデンデリシャスを、作品に取り込んだと考えられるのである。

一方、銀河鉄道沿線の高原においてトウモロコシを栽培するには、「棒で二尺も孔をあけておいてそこへ播かないと生えない」と説明しているものとは大きな隔たりがあり、これに気づいた村瀬(1989)は、「放っておいてもいいものがとれ

る所と、大変な努力をついやしてもあまり実りの得られない所があるというのだろうか。それにしてもこの描写の落差にはおどろかされるものがある。」と述べている。私はこのトウモロコシの話の出てくる第一次稿の前半(米地のいう0次稿)は先駆形とで、別に書かれたものであり、第三次稿では削除されていたと考えられるので矛盾はしない(米地、2009a)のである。ちなみに、賢治がこのインディアンの農法を伊豆大島で実践したことは詩「三原三部」から知られる。

要するに、賢治はこの種の幻想的な物語を書くときにも農業技術のことを中に盛り込んでいるのである。

4. 賢治とゴールデンデリシャス

「銀河鉄道の夜」のリングをゴールデンデリシャスとする私の説には、その普及時期についても異論はあろう。例えば原(1999)は、「こんにちのデリシャス系の黄色のリングは大正期の輸入品種、賢治作品の成立期にはまだ普及していなかった」云々と述べているからである⁵⁾。

しかしながらゴールデンデリシャスは、1923(大正12)年にすでに青森県農業試験場に接ぎ木として導入され、1928(昭和3)年ころから市場に出回りはじめていたのである。すなわち「銀河鉄道の夜」の第二次稿執筆のころには少なくとも国内での結実の段階には達し、市場にも登場しつつあったのであり、燈台守が登場する第三次稿が書かれたころには、さらに流通段階にさえ至っていたと思われる。なぜなら、前述のようにこのゴールデンデリシャスは、接ぎ木してから18ヶ月後、つまり一年半後には実が生るとして、その生育のスピードの点でも優れている(島の随想、沢田・岡編、1989による)からである。

賢治は園芸学も学び、最新の農業技術についての情報も入手できたし、リングが好物でもあったから、この夢の品種とも言われたゴールデンデリシャスを「銀河鉄道の夜」の執筆時に知っていた(食べたかどうかはわからないが)ことはほぼ間違いないであろう。

IV 燈台守と日本人と讚美歌

1. 日本人乗客とリンゴ

第二次稿では日本人名の四人の姉弟とその家庭教師の青年が五つのリンゴを一つずつ食べる。それを見ていたジョバンニは「僕はもうあゝ云ふ苹果を百でももってゐる」と思ったとある。このリンゴがヘラクレスのリンゴなら、すでにジョバンニがもっていると思うのは奇妙である。

一方、第三次稿では日本人名の姉弟は二人だけとなり、彼らとその家庭教師の青年とが三つのリンゴを一つずつ食べ、残りの二つはジョバンニとカムパネルラとがもらうが、二人とも食べずにポケットにしまう。この際、燈台守は「いかゞですか。かういふ苹果はおはじめてでせう。」と青年に勧める。燈台守はジョバンニたちにも勧めるが、「はじめてでせう」とは言わない。また、青年はそのリンゴの立派さに感嘆した様子であり、それを姉弟ともども食べる。ところが、ジョバンニたちには感心したり驚いたりする様子はなく、食べようともしないのは、ヘラクレスのリンゴとすれば、やはり不思議である。

しかしながら、このリンゴをヘラクレスのリンゴという性格のほかに、ゴールデンデリシャスも念頭に書かれたのであるならば、あまり不思議ではないかもしれない。なぜならジョバンニたちはゴールデンデリシャスを知っていたと賢治は想定した可能性があるからである。ジョバンニやカムパネルラの名前はイタリア風であるが、そのイタリアへは早い時期にゴールデンデリシャスが導入されたようで、特に北東部の南チロル地方は、現在でもヨーロッパのこの品種の大産地になっているのである。

この「銀河鉄道の夜」執筆時には、ゴールデンデリシャスが日本人にとっては珍しい時期にも、欧米、特に米国やイタリアでは既にある程度、普及していたのであり、それを賢治も知っていたと思われる。

2. リンゴの配り方の不思議さ

「黄金と紅にいろどられたリンゴ」の配り方に

は疑問がある。第二次稿では、長姉が五つのリンゴを持っており、男の子が欲しがると、女の子がジョバンニたちに気兼ねしてたしなめる。しかし長姉はそれに気づかず「いゝのよ。ちょうど一つづつあるわ。」と言って女の子、次に小さな女の子と配り、青年にも一つ配る。おそらく自分のための一つもある。ジョバンニたちの分は残らない。五人の日本人一行が五つのリンゴを一つずつ食べるのは、当然のように見えるものの、この一行の場合には不可解である。なぜなら救命ボートの席を他の子どもに譲った青年と姉弟たちの一行が、かたわらに少年たちがいるのに彼らにはリンゴは分け与えなかったのである。

第三次稿では、燈台守がまず青年に一つ勧め、次にジョバンニたちに二つ配り、眠っていた姉弟もそのあと一つずつ受け取る。この第三次稿には長姉と小さな女の子は居ないので、日本人三人と二人で、ちょうど五個になる。この場合は第二次稿よりは自然であるが、燈台守が青年に最初に勧めているのは不思議である。普通ならば燈台守は子どもたちから先に配るのが自然であり、家庭教師である青年が、姉弟が眠っていたからか自分のものを先に取ってしまった。最初にリンゴを手にした青年が、ジョバンニたちに気をつけてそちらを見たので、燈台守も青年の気持ちを察してジョバンニたちにリンゴを与えるのである。賢治の意図は、第二次稿では日本人にリンゴを食べさせたかったこと、第三次稿では最初に日本人の青年にリンゴを賛美させ、次いでそのリンゴの特性を知らせたかったこと、にあったと推測されるのである。

3. 日本を連想させる部分

「銀河鉄道の夜」のなかで、この燈台守の登場場面の後半から退去？前後は日本人ないし日本との関わりのある記述が多い。第一に、海難に遭った日本人の自己犠牲の話に対して、乗客のなかからの唯一の発言が、燈台守の慰藉の言葉であった。また、リンゴを配るのもまず日本人の青年からであり、五つのリンゴのうち三個は日本人に渡され

た。そしてリンゴの農法についてこの青年に語る
とき、パシフィックとは異なることを述べている。
燈台守はいわば日本人乗客の相手をし、特にリン
ゴを配り説明するために想定されたキャラクター
と言えるのである。

その燈台守はリンゴの挿話のあとには文中に現れ
ない。下車したことも書かれていないし、もともと
天上の住人であるから、南十字で死者たちととも
に下車するはずはない。にも拘わらず、南十字
のあとには乗客はジョバンニとカムパネルラの二人
のみになるから、おそらくは南十字よりも前に姿
を消しているのである。先に述べた賢治のメモに
燈台守を苹果の匂の前に登場させるという意味の
ものがあることから、彼の役目は長姉に代わって
リンゴを配るということにあり、その役割を果た
した後は知らぬ間に消えているのである。

そのリンゴの挿話の後には、銀河の河畔に並ぶ
「かささぎ」の話がある。これは第二次稿からあり、
七夕伝説に織女と牽牛を結ぶように天の川にカサ
サギが列になり橋の役割をしたことを踏まえてい
る。ギリシャ・ローマ神話の天上世界の中で、こ
このみが日本ないし東洋的な天上世界が挿入され
ているのである。

第二次稿では燈台守は登場しないが、日本人の
みがリンゴを食べる話であり、その後このカサ
サギの話がくる。このカササギの橋は何を渡すも
のであろうか。

4. 青い森と赤い円い実の謎

カササギが見えたということは、対岸がまだわ
し座であるということであろう。鷺の停車場は過
ぎたというが、わし座は翼は銀河に沿って南北に
伸びているが、胴と尾は銀河を横切っているので、
そのあたりの位置に停車場があるのであろう。高
い高い三角標の正面にきたとあるが、わし座の主
星アルタイル、すなわち牽牛星はやや南にあるの
で、矛盾はない。

星座と合わない点は、それが「青い森の中の三
角標」とあり、「青く茂った大きな林が見え、そ
の枝には熟して真っ赤に光る円い実がいっぱい」

と書かれていることである。わし座にも、牽牛星
にも、このような景色を連想させるものがなく⁹⁾、
謎として残されている。

なお、現在広く読まれている後期形（第四次稿）
では、このあと橄欖の森という青い森に繋がるの
で、赤く熟した丸い実はオリーブの実ではないか、
と考えたくなるが、橄欖の森は私のいう0次稿で
あり、こと座の話であって、賛美歌の歌われるた
て座の場面とは繋がらない。

もう一つの不思議な点は、この青い森のあたり
から車内では賛美歌が歌われはじめることで、ク
リスマンではないはずのジョバンニまで歌いだ
すのである。第二次稿では「あの聞きなれた主
よみもとの歌」とあり「主よみもとにちかづかん
／のぼるみちは十字架に／ありともなどかなしむ
べき／主よみもとにちかづかん。」の歌詞が示さ
れている。しかし第三次稿では「あの聞きなれ
た 番の讃美歌」と変わり、歌詞は削除されてし
まう。

この場合、「 番の讃美歌」と番号が空白のま
まになっているのがキーポイントである。なぜな
らば、1931（昭和6）年に賛美歌が改編されたこ
とを受けて、同じ賛美歌でも番号が変わったから
である。

賛美歌は明治初年以降、それまでの教派で別々
に賛美歌集が作られていたが、1903（明治36）年
に「各派共通賛美歌」としていわゆる明治版『讚
美歌』が出版された。その後版を重ね、おそらく
賢治が知っているのは大正期に出た版のものであ
ろう。私の手元にある『讚美歌』は1920（大正9）
年発行、翌年に参版とある。これも明治版『讚美
歌』と歌曲とその番号は変わっておらず、「主よ
みもとにちかづかん」は第249番で歌詞は「銀河
鉄道の夜」のなかのものと同じである。

原・横坂（2004）によると、大正末期には明治
版『讚美歌』の改訂を要望する声が高まり、1928
（昭和3）年に讚美歌改訂委員会が改訂に着手、
4年後に新しい『讚美歌』（いわゆる昭和6年版『讚
美歌』）が出版された。この中にも「主よみもと
に」は収められているが、番号は第320番に変わっ

た。歌詞は変わらないが、「主よ、みもとに近づく／登る道は十字架に／ありともなど悲しむべき／主よ、みもとに近づく」と漢字を多くし、読点を入れている。

賢治が賛美歌改訂について事前に詳しく知ったとは思えないので、おそらくは改訂後の昭和6年版『讃美歌』出版は知ったが、実物は見ないままであった可能性が高い。つまり新しい番号に書き換えるつもりで空白にし、歌詞は変わっているかも知れないのでカットした、ということであろう。

ここで賛美歌が歌われるのは、たて座が近づいたためである。この盾にはキリスト教の祈りがこめられ、星座図では盾の表の図柄は十字架である。この盾、いわゆるソビエフスキーの盾は、1683年にウィーンに攻め込んだ異教徒のトルコ軍を迎え撃ち、撃退してキリスト教世界を守ったポーランド王ソビエフスキーを記念してヘベリウスが星座としたものである。ただし、この「銀河鉄道の夜」では、おそらくは聖書や賛美歌にしばしば出てくる「主は我が盾」という言葉を連想して書かれている。

そして「主よみもとにちかづく」はタイタニック号の沈没の際に同船の専属バンドが、この曲を演奏しつつ、従容として船と運命を共にした話がよく知られており、大型客船で遭難した乗客の乗り合わせた銀河鉄道で歌われるのは、これを踏まえているが、別の曲であったという異説もあるらしい。

V ゴールデンデリシャスと島善鄰

1. 黄金のリングとゴールデンデリシャス

ゴールデンデリシャスは欧米に広まっていった。もともと欧米では日本のような「リングは赤い」という先入観はない。むしろ、黄色いリングの方がより一般的であった。トロイ戦争のもとになったというリングも黄金のリングであり、ヘラクレスの取ってきたリングも黄金のリングである。

その黄金のリングと言うべき優れた品種が生まれたという情報はまたたくまに広がり、しかもその名がゴールデンデリシャスという、まさに待望

の品種であった。

この情報が日本にも流れてきたとき、それまでの紅玉などの赤いリング中心のリング生産が転機を迎えるのではないかと、という不安と期待の交じった状況が日本のリング業界に広がっていった。岸本(1982)は、日本の農家の戸当たり経営面積は小規模なため、農民の間でも品種改良への関心が高い、と述べ、「品種改良の途中であっても、某系統は有望である、とのうわさが立つと、試験場に種々な経路を通じて接木をするための穂木を要求する声が響き続ける。リングやナシで、新品種の穂木が救世主のごとく、剪定した枝が一キログラムときには一芽がいくらといった状況も過去にみられた。」と記している。果樹の教科書においても、品種改良についてのページ数の割合は、諸外国で5%、日本は10~20%である、と岸本は記している。

このように品種改良への関心と期待の大きな日本に、ゴールデンデリシャスの接ぎ木用の穂木を持って帰ったヘラクレスのごとき人物が現れたのである。その人こそ、「リングの神様」と呼ばれ、のちに北海道大学学長となった島善鄰(しま よしちか、1889-1964)であった。

2. 島善鄰と賢治

ヘラクレスが大西洋の東岸、ヘスペリデスの園からリングの枝を持ってきたように、島善鄰は大西洋の西岸、ニューヨーク農事試験場からリングの枝、すなわち接ぎ木用の穂木を日本にもたらしたのである。

島善鄰⁷⁾はいわゆる花巻侍(盛岡藩南部の家臣で花巻城を守る武士たち)の後裔で、1889(明治22)年、現花巻市高木の堰袋に生まれ、軍人であった父親とともにその任地にあったが、父の死去後は現花巻市沢で少年時代を過ごした。島は盛岡農学校、盛岡中学校、仙台第一中学校と転じ、1908年東北帝国農科大学(現北海道大学農学部)に進学する。短期間ながら盛岡中学校にも在籍したから、賢治にとっては同郷、かつ同窓の先輩に当たるし、花巻農学校教諭であった賢治には盛岡

農学校生であったことにも親近感を持ったであろう。鳥は士族からではなく、花巻の豪商瀬川家から妻を迎えたため、同じく豪商の一族である宮沢家の賢治にはより身近になったことは、後述の通りである。

鳥は東北帝国大学農科大学で、園芸学を専攻し、卒業後教室の助手を勤めていたが、佐藤昌介農科大学長から青森県に技師として赴任するよう（小笠原、2008）要請され、1916（大正5）年から青森県農事試験場技師となり、リンゴの品種改良や栽培技術の向上に目覚ましい成果をあげた。1922（大正11）年欧米視察の命を受けて、2月に渡米、米国、カナダ、英国、ドイツ、フランス、イタリア、カナダを歴訪したが、中心は米国であり、ゴールデンリッシュスについての情報を把握し、ニューヨーク州立農事試験場から、翌1923（大正12）年の帰国時に待望の接ぎ木用の穂木三本を日本にもたらした。その一本は青森県農事試験場に、他の二本は山形、福島両県へ分けたという。1927（昭和2）年に北大に戻り、助教授、1939（昭和14）年教授に昇任、1950（昭和25）年からは学長を勤めた。

増子（1997）は賢治と同郷、同時代の人として鳥善鄰がおり、賢治よりも七年前の1989年7月23日に生まれたことの偶然を見いだして驚いた、と

いう。「同じ農業技術者の道を目指しながら、鳥善鄰と賢治が生前、交友関係を持った形跡はない。」と、増子（1997）は記している。

しかし、賢治が農業技術者・鳥の業績を理解し、尊敬していたであろうことは想像に難くないし、農業技術者の道を歩み出していた賢治にとって、憧憬の対象でもあったはずである。「銀河鉄道の夜」の燈台守と日本人青年との双方に鳥善鄰のイメージが投影されているのである。燈台守の口調は、鳥捕りとの会話では打ち解けた下町風であり、日本人青年たちとの会話では丁寧な口調になっている。鳥善鄰のイメージが投影された場合に紳士的な会話になっているのである。

さらに重要なことは、実は鳥善鄰夫人浦子は、賢治の親戚であったのである。すなわち、浦子の兄瀬川周蔵は豪商松屋の当主となり、瀬川弥右衛門の名を襲名するが、彼の夫人は賢治の叔母（母イチの末妹）コトである。つまり、賢治の叔母の義妹が嫁いだ人が鳥善鄰で、叔母の義理の弟に当たるのである。また瀬川周蔵の弟の貞蔵は賢治と盛岡中学校で同級生であった。

この瀬川弥右衛門の松屋の名は、賢治の1918（大正7）年5月27日付けや1919（大正8）年1月24日の父政次郎に宛てた書簡にある。特に後者は賢治が妹トシの入院の看護のため上京中のもので、

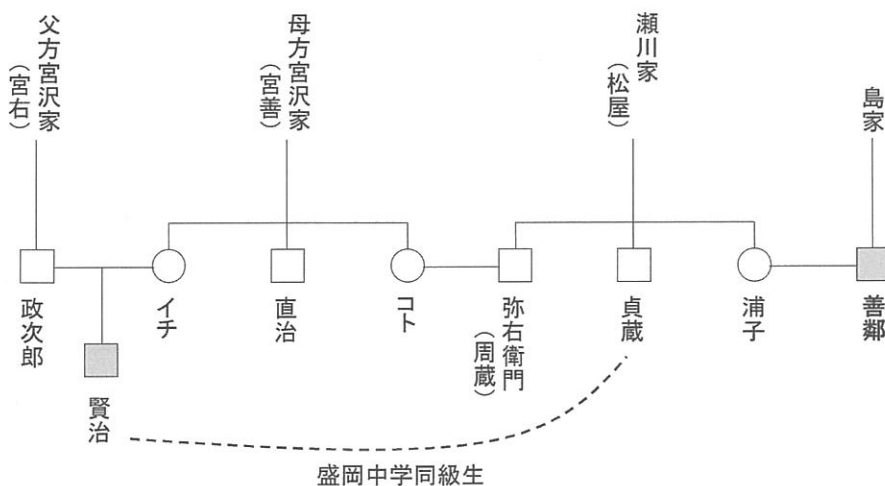


図2 宮沢賢治と鳥善鄰との関係を示す家系略図

「昨日京橋のことさんの所より」トシの病状を尋ねる葉書があり、さらに貞蔵がやはり東京で入院していることも書いてあったので、見舞いをし、トシについても話したとある。実は、この二つの書簡の間、1918（大正7）年11月に瀬川浦子は島善鄰に嫁いでいるのである。

この1919（大正8）年の葉書からも分かるように、賢治は島善鄰夫人浦子の実家の人たちと親しかった。したがって賢治が、実の叔母の義弟であり、かつ同級生の義兄でもある島善鄰のことをよく知っていたことは確実であり、直接、面識があった可能性もあるのではないだろうか。

3. 燈台守の登場の時期

「銀河鉄道の夜」の燈台守の登場の背景に、島善鄰のゴールデンデリシャス導入があるとする仮説が成り立つには、時系列的なチェックが必要である。ゴールデンデリシャスの接ぎ木用の穂木は1923（大正12）年に青森へ届いている。したがって、燈台守が登場する原稿、いわゆる第三次稿はもちろんこのあとに書かれたのである。入沢（1997）は「銀河鉄道の夜」の《着想は一九二四年の夏で、着手はその秋》と推定している。これは第一次稿のことであるから、少なくとも青森でゴールデンデリシャスの試験栽培が進んでいる時期に第三次稿が書かれたことは確かである。

賢治が個人的にもリンゴが大好きで、白藤（1972）はリンゴを丸かじりしながら街を歩いていた賢治の姿を記しているが、賢治は園芸学にも通じ、農業技術者を目指しており、同郷の島善鄰の功績でもあることから、この段階でゴールデンデリシャスの情報を得ていたこともまた確かであろう。

私は第二次～第三次稿は、1931（昭和6）年の年末以降の執筆ではないか、と考えている。その理由の一つは、その12月に前述の『讚美歌』の出版があり、賛美歌の番号の留保や歌詞の消去などの第三次稿における推敲に影響を与えたと推定できる。また、同年の10月4日には、青森県の現三沢市淋代を発った米国人飛行士二名の乗ったミ

ス・ビードル号が初の太平洋横断飛行を試み、翌5日に米国太平洋岸のワシントン州ウェナッチ市に着陸した。淋代では地元の人々から差し入れがあったが、米国到着時には五個の紅玉が残っていて、日本からのお土産のリンゴとして有名になった。「銀河鉄道の夜」に登場するリンゴが五個で、パシフィック云々という話がでてくるのも、この出来事が念頭にあったからではあるまいか。とすると第二次稿も1931（昭和6）年末以降の執筆ということになる。

翌1932（昭和7）年4月にはウェナッチ市からリチャードデリシャスの穂木（1mほどの枝）五本が送られ、青森県では大きな話題になった。この品種はデリシャスの枝変わりりで濃紅色である。

このころゴールデンデリシャスは市場に登場して三年ほど経ち、高級リンゴとして声価がますます高まっていた。また、このゴールデンデリシャスが優秀な交配親になるという点にも専門家が着目し、1931（昭和6）年には早くも青森県の主産品種の一つである印度との交配が行われ、のちにゴールデンメロンとして市場に出る⁸⁾。

「黄金と紅にうつくしくいろどられた」リンゴは、第二次稿では窓の外のヘルクレス座のリンゴを長姉がいつのまにか手に抱えているという設定であるが、この時点ではヘラクレスを暗示させることは推定できるものの、ゴールデンデリシャスの島善鄰についてはそれを表意していることはわかりにくかった。しかしながら第三次稿では、燈台守が変光星を主星とするヘルクレス座の擬人化した姿で登場し、それとともに、日本人の青年にリンゴを勧め、その栽培について語っており、島善鄰とゴールデンデリシャスのイメージが重なっていることが表意されるようになっていく。ちなみに島善鄰が米国でゴールデンデリシャスを初めて直接目にした1922年、彼は32、3歳の青年であった。

翌1923年、島は日本にゴールデンデリシャスの枝は接ぎ木用の穂木として、船でパシフィックを渡り持ってきた。そのことをあらためて賢治に想起させた出来事が、1932～33年の太平洋横断飛行

とリンゴの話題であったと思われる。リンゴの数が五個で、枝も五本、パシフィックの上の天空を飛んで運ばれたことなど、第二～三次の原稿に反映したのであろう。なお1931（昭和6）年9月には、島の名著『実験 リンゴの研究』が上梓されており、それも賢治の注目したところであろう。

VI 残された問題点と明らかになった点

1. リンゴの皮が消える不思議さ

「…また折角剥いたそのきれいな皮も、くるくるコルク抜きのやうな形になって床に落ちるまでの間にはすうっと灰色⁹⁾に光って蒸発してしまふのでした。」という場面がある。これまで、この剥いた皮が床に着くまでに消えること不思議さが注目されてきたが、これを単に神秘的な現象として解されてきた。確かに天上の食べ物らしい幻想的な記述ではあるが、そのように描写する必要があったかどうかは問題であろう。また、賢治は「紫紺染について」という作品では、山男が西洋料理店でデザートに出た青リンゴを他の人と同じように皮を剥くが、かまど（子房とその中の種、いわゆる芯を呼ぶ方言）も剥いた皮も食べてしまうという場面がある。この車中では皮は消えたが、かまどはどうなったか、書いていない。消し方が難しかったのであろう。

私はこの皮が消える話は、銀河鉄道の車内を清潔、静謐なものにするためであった、と考えている。床に落ちる前に消えるというのは、リンゴを食べた人たちは皮を床に落とすつもりでいた、ということである。1960年ころまで日本の列車の客車は現在のような奇麗な車内ではなかった。乗客は、ミカンの皮や食べかすの袋、空になった駅弁の折り箱、アイスクリームの空き箱、落花生の薄皮、などを皆、座席の下などの床に捨てていた。また新聞紙を床に敷いて足を乗せている人もいた。時折、車掌がホウキを持って現れ、大量のゴミを集め、押すように通路の端へ床の上を運んだものである。リンゴを剥く日本人の一行も、当然のように床に捨てるつもりだったのである。

もちろん、「銀河鉄道の夜」は幻想的な物語で

あり、夢の中の出来事であるから、神秘的なことが起こっても読者には違和感はなく、それを意図しつつ天上の列車の清潔さを保つための賢治の工夫と読むこともできるのであるが、なお検討を要する。

2. 燈台守と信号手の関係

現在、一般に読まれている「銀河鉄道の夜」すなわち後期形と呼ばれているバージョンには、燈台守と似た性格の登場人物としては信号手がいる。

信号手と燈台守との共通点は、鳥の群と関わることである。燈台守は灯の前を鳥の群が横切るために不規則な点滅になることを語るが、「寛い服を着て赤い帽子をかぶった」信号手は鳥の群を両手に持った赤と青の旗を振って誘導する。

この信号手は私（米地、2009a）は先駆形（0次稿とも称すべきもの）として、第三次稿段階ではすでに削除されていた、と考えている部分に含まれる。したがって、燈台守は信号手と入れ替わって登場するキャラクターなのである。

したがって、信号手が指示を与える鳥の群も流星群を指すと思われる。そしてこの信号手は、ヘラクレス座ということになる。赤い帽子はヘラクレス座の赤いβ星ゲバルライで、赤と青の旗はα星ラース・アルゲティというオレンジ～赤色の3等星（変光星なので3.0～3.9と変わる）と、これと二重星になっている青色の6等星とみられる。

ヘラクレスは彼の12の功業の第5番目でステイロンパロスという害鳥の群を退治する仕事であり、一部は弓矢や投石機で射落とし、他は青銅の鳴子を使って追い払ったという話であるから手旗のようなものを振るのは違いますが、星座のキャラクターのなかで鳥の群と直接関わるものは、ヘラクレス座のみであるから、信号手はやはりヘラクレス座であろう。

この信号手は鳥たちに教えているのか、と女の子が聞くが、「射手のそこから鉄砲があがるため」あるいは推敲して「どこからかのろしがあがるため」鳥たちに教えるのだとカムパネルラが「少しおぼつかなさうに」答えたとある。実は鳥たち

を安全に飛行させるためなのか、あるいは射手のところへ追い込むためなのかはわからないのである。信号手が「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥」と叫ぶが、これはおそらく高浜虚子が1916（大正5）年11月に作った「木曾川の今こそ光れ渡り鳥」にヒントを得たものであろう。この句は恵那中津川に小鳥狩に行った折の句である。このころの小鳥狩では棒の先に布を旗のように付け、これを振って霞網に小鳥の群を追いつまむという¹⁰⁾。この信号手の場合は小鳥を捕るためか逃がすためかは定かでないが、少なくとも狩りと関係するものであろう。

私が先駆形（0次稿）が第三次稿段階では削除された、と考える理由の一つは、この先駆形にインディアンが鶴を射る場面や、渡り鳥の狩など殺生を連想させる場面があるので、宗教色が強まる第三次稿以降の「銀河鉄道の夜」にはふさわしくないと賢治は考え、削除したとみられるからである。

3. 賢治自身と燈台守

賢治は夜の散策も好んだ。よく通ったルートの一つは朝日橋からいわゆるイギリス海岸への北上河畔であった。その散策は短歌や詩に詠われ、前者の北上川連作と呼ばれる歌群や、詩「薙露青」

などに典型的なものがみられる。

それらには「みおつくし」が詠みこまれており、光りは発しないものの月光を受けたその姿に魅せられている賢治の姿を彷彿とさせる。北上川の川面には小さな波が立ち、それが光を反射してきらめき、頭上を鳥が鳴きながら通り過ぎる。河畔に立つ賢治はおそらく自らを燈台、光を発しない燈台のように思っていたと思われ、今後より検討を深めたい。

4. 賢治の重層的な物語世界

賢治の作品のなかの特異なキャラクターには、重層的な背景をもつものが多く、例えば「猫の事務所」の獅子（米地、2007）も、「銀河鉄道の夜」の「鳥捕り」（米地、2008）も同様である。すなわち次の三つが重なり合っているのである。

- ①一般的な広い視野で賢治が捉えた知的な世界像（宇宙観、宗教観、社会観など）
- ②賢治にとって身近な岩手の風土や民俗の中で捉えた地域像
- ③賢治自身の内面の人間像

「燈台守」の場合は、①は広い天文学の世界のヘルクレス座やギリシャ神話のヘラクレスの話、

表 銀河鉄道の「燈台守」にみるリング持ち込みの重層性

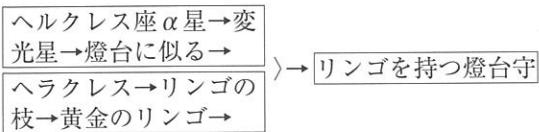
	「銀河鉄道の夜」	ギリシャ神話	1920年代の出来事
リングを持ち込む人物	燈台守	ヘラクレス	島善鄰
持ち込んだリング	黄金と紅に いろどられたリング	黄金のリング	ゴールデンデリシャス
リングの原産地	天上 (ヘルクレス座)	西の地の果て ヘスペリデースの園	米国
リングを 持ち込んだ場所	銀河鉄道の車内	ギリシャ（ミケナイ）	日本（青森）

②は花巻出身の鳥善鄰のゴールデンデリシャス導入の話、③は夜間の散歩を好み、北上川河畔にたちつくす賢治、の三者が重なっているのである。

おわりに

賢治の「銀河鉄道の夜」の中の謎の登場人物の一人「燈台守」は、いつから銀河鉄道に乗っていたか定かではない。しかし白鳥の停車場でそこまでの乗客は皆下車して、ジョバンニとカムパネルラだけが車中に戻ったように書かれているから、その停車場で乗ったのであろう。そしてわし座付近を通るあたりで姿を消すようである。

その出現する位置、燈台に似た変光星、さらに彼が黄金のリングを持ち帰ったなどからリングを持ってくる燈台守はリングの枝を持つヘルクレス座の化身であると推定された。



となるのである。

さらにこのヘラクレスと同様にリングの枝をもたらしした人物・鳥善鄰もこの燈台守に投影されている。すなわち

鳥善鄰→ゴールデンデリシャスの穂木→黄金のリングの枝→ヘラクレス→燈台守

という連鎖になる。

宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」に書かれた幻想な場面は、しばしば彼の驚くべき想像力によって創造されたとして、そのなかから哲学的あるいは宗教的な深い意味を読み取ろうとする試みがなされてきた。たしかにそのような解釈にも意義はあり、例えばこの作品の「乳」については宗教的な深い意味がある(米地、2009b)。しかしながら、賢治は生まれ育った風土や時代の影響のもとに、彼の知識や経験を素材として、作品を紡ぎ出したのでもある。その糸や図柄に当たるものを、花巻ないしは岩手の風土や、大正から昭和初期の時代のなかから拾い出すことが重要なのであり、この燈

台守とリングに関する拙論もまたその試みの一つである。

【注】

- 1) 「銀河鉄道の夜」の中では「燈台守」のほかに「燈台看守」とも書かれており、「燈台守」は2回、「燈台看守」は4回、使われている。
- 2) 男の子は「タダシ」(愛称タアちゃん)、女の子は「かほる」(または、かほる子)、長姉は「きくよ」という名である。
- 3) 現在、読まれている後期形(第四次稿)とされているものでは、この間にインディアン座やつる座などに関わる挿話などが入っているが、これらの星座は銀河からは大きく離れており、米地(2009a)はこの部分を先駆形(いわば第0次稿)として別なバージョンとすべきである、と主張している。
- 4) なお賢治は「約婚指輪」と書き、「エンゲージリング」および「えんげいじりんぐ」とルビしている。なお環状星雲にはフィッシュマウスネビュラとルビしているが、童話「土神ときつね」でも、狐が環状星雲(リングネビュラと振り仮名)が魚口星雲(フィッシュマウスネビュラと振り仮名)ともいうことなどを語り、水沢の天文台で見たと話す。また「星めぐりのうた」ではアンドロメダ座の魚口星雲を歌っている。
- 5) 原は、賢治作品の黄色いリングは、明治期に輸入された「黄金」種の可能性が高い、と記しているが、「黄金」という名の品種の存在は確認できなかった。名の似たものでよく知られた品種には「黄金丸」があるが果実が小さく、「銀河鉄道の夜」の黄金のリングには当てはまらない。賢治の時代に普通の大きさで生産量が多かった黄色いリングには、柳玉(ツルナガの名もある)があった。
- 6) 星座図にはヘルクレス座のリングの枝に付いた実を赤く塗ったものもある。ただし、すでにその枝の付近を過ぎて南下してしまっているため、これではないと思われる。
- 7) この節の記述には花巻新渡戸記念館(1994)、青森県りんご百年史(1977)、鳥善鄰先生生誕百年記念誌(1989)、および花巻新渡戸記念館編著(1994)などを参考にした。また、匿名の査読者のお一人からは燈台守には鳥善鄰のほかに篤農家松岡機蔵のイメージも入っているのではないか、というご意見をいただいたが、これは今後の検討課題の一つであろう。
- 8) この印度との交配という組み合わせからは、のちに「陸奥」や「王林」という大品種も生まれている。このほか、ゴールデンデリシャスを交配親とする品種は数十種あり、日本で作られた優秀なものには「王鈴」(デリシャスと交配)、「つがる」(紅玉と交配)、「世界一」(デリシャスと交配)、「シナノゴールド」(千秋と交配)、「金星」(交配相手?)、などがあり、米国でも「ジョナゴールド」(紅玉と交配)が生み出されている。

- 9) 灰色に光るといふくぐりや、食べようとすると灰になってしまうという「ソドムのリンゴ」(別名、死海のリンゴ)を連想させるけれども、清浄な銀河鉄道と、悪徳と汚濁の都ソドムとは無関係であろう。
- 10) この虚子の句の作られた場所は、鳥屋場(とやば)として知られた中津川の宿屋「長多喜」で、棒は「ぼい(追い)棒」と呼ばれる三間ものの竹竿であり、その先に数尺の長さの絹の布を付け、これを振ると鷹の羽音によく似た音が出るため、あらかじめ囀の鳴き声に誘われて集まっていた小鳥は一斉に飛び立って、張ってあった霞網にかかったという。これに似た小鳥狩は北上山地でも主に秋に行われていた。

【謝辞】

本稿をまとめるにあたり、今井敏信氏、花巻新渡戸記念館の佐藤茂館長はじめ同館の皆さん、増子義久氏など多くの方々のご教示、ご協力をいただきました。記して謝意を表します。

【引用ならびに参考文献】

- 青森県りんご百年史記念事業会編(1977) 青森県りんご百年史. 同記念事業会.
- 天沢退二郎(1985) 苹果のアンソロジー. 別冊太陽「宮沢賢治 銀河鉄道の夜」. 50.61.
- 天沢退二郎(1987) エッセー・オニリック. 思潮社.
- 池野正樹(1996) 賢治の見た星. 上田哲ほか. 図説宮沢賢治. 36-43. 河出書房新社.
- 入沢康夫解説(1997) 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の原稿のすべて. 宮沢賢治記念館.
- いわてりんご100年祭記念事業会編(1971) いわてりんご百年のあゆみ. 同記念事業会.
- 小笠原正明(2008) 佐藤昌介伝 北大を築いた南部人. 岩手日報社.
- 鎌田東二(2001) 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」精読. 岩波書店.
- 岸本修(1982) くだものと環境. 古今書院.
- 草下英明(1975) 宮澤賢治と星. 学藝書林.
- 斎藤康司(1996) りんごを拓いた人々. 筑波書房.
- 斎藤文一・藤井旭(1988) 宮沢賢治 星の図誌. 平凡社.
- 沢田英吉・岡不二郎編(1989) 鳥善鄰先生生誕百年記念誌. 同記念会.
- 四宮俊之(2007) りんごの消費や需要に見る歴史文化性の差異について. 弘前大学院地域社会研究科年報. 4. 21-38.
- 鳥善鄰(1931) 実験 リンゴの研究. 養賢堂.
- 鳥善鄰(1950) リンゴ栽培の実際. 養賢堂.
- シャドヴァルト(河原訳、1963) 星のギリシャ神話. 白水社.
- 原著: Shadewaldt, W. (1956) Griechische Sternsagen. S. Fischer Verlag. Frankfurt.
- 白藤慈秀(1972) こぼれ話 宮澤賢治. 杜陵書院.
- 菅谷規矩雄(1980) 宮沢賢治序説. 大和書房.
- 杉山芬・杉山雍(2005) 青森県のりんご 市販の品種とりんごの話題. 北の街社.
- 中野由貴(1998) 宮沢賢治のお菓子な国. 平凡社.
- 沼田純子(1996) 「銀河鉄道の夜」ところどころ. 私読. 宮沢賢治. 14. 120-132.
- 西田良子(2003) 四つの「銀河鉄道の夜」—改稿にみる創作意識の変化—. 西田編. 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」を読む. 創元社. 206-229.
- 野尻抱影(1977) 星の神話・伝説. 講談社.
- 萩原昌好(1994) 《テキスト評釈》『銀河鉄道の夜』. 国文学 解釈と教材の研究. 39-5. 54-70.
- 花巻新渡戸稲造記念館編(1954) 鳥善鄰—りんごの恩人. 同館.
- 花巻市教育研究所(1992) 中学生のための花巻人物誌「揆奮」. 同所.
- 原子朗(1986) 苹果(林檎・りんご). 国文学 解釈と教材の研究. 31-6. 167.
- 原子朗(1999) 新宮澤賢治語彙辞典. 東京書籍.
- 原恵・横坂康彦(2004) 賛美歌 その歴史と背景. 日本キリスト教団出版局.
- 広畑玉紀(2003) 「銀河鉄道の夜」の脇役たち. 西田良子 編著 「『銀河鉄道の夜』を読む」. 創元社. 267-279.
- 萬田務(2001) 「銀河鉄道の夜」考—(苹果)をめぐる—, 石田徹編. 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」作品論集. 259-269. クレス出版. (初出: 国文学 解釈と鑑賞. 1993. 9月号)
- 増子義久(1997) 賢治の時代. 岩波書店.
- 増田利幸(2002) 「銀鉄」考—宮沢賢治とギリシア神話—. 東京図書出版会.
- 宮沢清六(1991) 兄のトランク. 筑摩書房.
- 見田宗介(1984) 宮沢賢治 存在の祭りの中へ. 岩波書店.
- 村瀬学(1989) 『銀河鉄道の夜』とは何か. 大和書房.
- 藪内清(1993) ヘベリウス星図図説. 地人書館.
- 山本一清(1929) 天文の話. 小学生全集. 62. 1-174. 文芸春秋社.
- 吉田源治郎(1922) 肉眼に見える星の研究. 警醒社.
- 米地文夫(2007) 宮沢賢治「猫の事務所」と郡役所廃止—政治的世界・民俗的世界・賢治の内面世界の重層性— 総合政策. 9-1. 17-34.
- 米地文夫(2008) 銀河鉄道の「鳥捕り」狐仮説からみた宮沢賢治の重層的世界—総合政策. 10-1. 15-24.
- 米地文夫(2009a) 「銀河鉄道の夜」六分割論—「楽しき先駆形」と「ありうべかりし第五次稿」の識別— 宮沢賢治 Annual. 19. 157-168.
- 米地文夫(2009b) 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」の「乳」のモチーフと「五時五味」の譬え. 地域文化研究所報告. 10. 58-101.

なお、賢治作品からの引用は『新校本 宮澤賢治全集』(筑摩書房)に拠った。

(2009年12月2日原稿提出)

(2010年4月1日受理)

Kenji Miyazawa's Multi-layered World Viewed from the Hercules Hypothesis Regarding the Lighthouse Keeper in "Night on the Milky Way Railroad"

Fumio YONECHI

Abstract

The lighthouse keeper is one of the most impressive characters in Kenji Miyazawa's unfinished novel, "Night of the Milky Way Railroad". He appears in a compartment of the Milky Way Train when the train is in the vicinity of the constellation of Hercules. The character simultaneously represents Hercules, who stole the golden apples from the Garden of the Hesperides, Dr. Yoshichika Shima, an agricultural engineer from Hanamaki where Kenji was born, and Kenji himself, who is standing alone on the bank of the Kitakami River. There is a variable star in the constellation of Hercules that twinkle in the night sky like lighthouse and Dr. Shima imported Golden Delicious apples to Japan from the United States for the first time. Thus, this episode concerning the lighthouse keeper is a typical example of the multi-layered worlds that appear in Kenji's literary works.

Key words

Kenji Miyazawa, "Night on the Milky Way Railroad", lighthouse keeper, Hercules, Yoshichika Sima, Golden Delicious, agricultural engineer